

国際社会に対応する日本語の在り方(抜粋)(平成12年国語審議会答申)

I 国際社会における日本語

近年の国際社会の大きな変化の中で、日本語に対する需要や期待も従来とは異なったものになりつつある。今後は、母語としての日本語を大切にするとともに、視野を世界に広げ、国際社会の動向や世界の言語状況を踏まえつつ、日本語の在り方を考えていく必要がある。

1 国際社会と言語

言語は人々のコミュニケーションを担い、一人一人の自我の意識を支える大きな役割を担っているものである。近代国家においては、言語は人々の生活や意識の基盤として、国民統合のために重要な役割を果たしてきた。一方で、人類はその永い歴史の中で、古くから言語の違いを超えて交流を行い、外交や通商、文化などの様々な分野で関係を築いてきた。

最近の国際社会は、国境を超えた地球社会としての性格を強めつつある。地球環境問題への対応など人類共通の課題に対し、各国が連携協力してその解決に当たることの重要性が高まっており、経済においても相互依存の深化と国際競争の激化が共に進行するなど、様々な問題が地球規模で発生・進行し、地球規模での取組が進められている。また、国家だけではなく地方や民間団体、さらには個人が国際関係の主体として活動する状況も生じている。交通輸送手段や情報通信ネットワークの目覚ましい発達に伴い、人・物・情報の国境を越えた往来も飛躍的に増大している。

このような世界の構造的な変化の中で、諸言語の相互関係やそれぞれの言語が担う役割にも大きな変化が生じている。

英語は実質的に、世界の共通語として情報交流を担う機能を果たしつつある。現在、多くの国際機関で英語を公用語として用いており、また、インターネット上で得られる情報も英語によるものが高い割合を占めている。国立国語研究所を中心に行った「日本語観国際センサス」(平成9～10年、28か国・地域で実施した調査)によれば、「今後世界のコミュニケーションで必要になるとと思われる言語」として、1か国を除くすべての国・地域で英語が第1位に挙げられた。国内においても、文化庁の「国語に関する世論調査」(平成12年)によれば、世界の人々の共通のコミュニケーション言語として英語が用いられることを、積極的又は消極的に認める人が多数を占めた。今後、国際間の交流がますます盛んになる中で、英語が国際語として用いられる傾向は一層強まることが予想される。

一方、母語尊重の意識の高まりや、少数言語を保護する政策の実施など、個々の言語を大切にしようとする考えに立った動きも世界の各地で見られる。ユネスコ(国連教育科学文化機関)は多言語・多文化尊重の考えに立つ政策の実行を世界に向けて提案している。EU(欧州連合)では通訳・翻訳に膨大な経費を掛けつつ11言語を公用語とする体制を維持している。また、国民の識字率の向上や自国内での公用語の普及を政策の大きな課題として努力を続けている国もある。ドイツやフランスは世界における自国語の普及に力を入れている。オーストラリアやカナダでは多文化主義政策に基づく多言語教育を実施している。このように、世界の言語状況は、各国・各言語などの事情に応じて多元的に展開しているが、総じて個々の言語や文化を尊重し、それらを共に生かし合える世界を作ろうとする考えや動きが高まっていると言える。平成12年7月に開催された主要国首脳会議(九州・沖縄サミット)において

も、言語的な表現における多様性の重要性を認識し尊重することがうたわれ、異なる文化及び非母国語への理解を向上させるような教育の推進が提唱された。

以上のような国際社会と言語の動向の中で、諸外国においては外国語教育を強化し、人々が多言語を使う能力を身に付ける傾向が生じている。我が国においても、国際化時代における日本人の言語能力を総合的に考える視点に立って、母語としての日本語の教育と、外国語の教育を一層充実させていくことが望まれる。

3 日本語の国際的な広がりについての基本的な考え方

地球に存在する一つ一つの言語は、それを母語とする民族や集団の思想や文化を担うものであり、人類共通の財産でもある。様々な言語が担う価値観や思考方法などの多様性が人類の文化の総体を豊かに作り出すのであり、それらの多様性は、個々の価値観が持つものの見方や考え方の限界を補完し、一元的な思考が陥る危険性を回避する力を持つ。現在、英語が世界の人々のコミュニケーションのための言語として広がりつつあるが、特定の一言語が人類の文化の多様性を担うことはできない。したがって、地球社会としての性格を強めると考えられる今後の世界においても、様々な言語の存在によって人類の有する多様性が生かされていくべきである。付け加えれば、世界の中に複数の言語を使える人が増えていくことは、人類が持つ多様な価値観や考え方等が、より広く理解され生かされていくことにつながると言えよう。

日本語は、古代から現代に至るまで、日本人の思考や心情を支える基盤となり、数々の文学や思想を生み出し、近代国家としての日本の発展や、日本における近代科学や技術の発達をも支えてきた。また、日本は中国や西洋など海外の文化を積極的に取り入れてきた歴史を持ち、現在においても外国語で書かれた文献の自国語への翻訳点数において世界有数であることから、諸外国の文物に関する日本語による豊富な蓄積が生じている。これらの日本語による所産の蓄積は、世界の文化資産の一つとして活用し得るものであり、現に、日本独自のものを学ぶことと並んで、アジアからの留学生がヨーロッパの文献を、アメリカからの留学生が中国の文献を日本語で学んでいるような例も見られる。

私たち日本人は、母語としての日本語を大切にし、継承・発展させていくとともに、日本語やその所産を人類の文化資産の一つととらえ、その存在意義や価値、果たすべき役割を提言し、地球社会においてそれらが発揮されるよう行動する主体性を持つべきである。すなわち、現に存在する世界の人々の日本語への評価や期待にこたえとともに、日本語が果たし得る積極的な役割がより一層世界の人々に認識され、日本語使用の国際的な広がりが拡大していくよう、世界に発信し、日本語使用や日本語教育の充実のために必要な体制を積極的に用意していくべきである。併せて、伝統を生かす美しく豊かな日本語の在り方や、コミュニケーションに適した平明で的確な日本語の使い方についても、絶えず追求していかなければならない。

日本語による情報発信は、日本人の思考や広い意味での日本文化の発信である。日本語を通じた様々な情報の受容や、日本語によるコミュニケーションを通して、世界の人々に日本や日本人についての理解を深めてもらうことが大切であるが、日本語の国際的な広がりには、世界の人々にとって日本語あるいは日本や日本人が魅力的であること、また日本人もそれらに誇りを持っていることが前提となる。したがって、日本人が世界の人々にとって人間的に、そして文化的に、より魅力ある存在であるよう、自覚的に努力していくことが必要だと言える。

II 日本語の国際化を進めるための方針

3 国際化に対応する日本人の言語能力の伸長

日本語は、それをを用いる日本社会の歴史の中で現在の姿に整えられ、日本人の伝統的なコミュニケーションの特色を反映した形で用いられてきたものである。国際化の進展や日本語の国際的な広がりを踏まえ、国際社会へのより積極的な参画を視野に入れて、現在の日本語の運用実態や日本人の言語能力の現状を見直し、改善を図っていく必要がある。

(1) 国際的な視点から見た日本人の言語運用の特徴と問題点

日本人同士の意思の伝達は、世界的な視野で見ると、場面や人間関係などの共通理解に基づく察しが言語表現を補う形で行われる傾向が強い。また、「以心伝心」のような言い回しが使われることに表れているように、日本人は伝統的に、言葉で言い尽くさずに互いに察し合うことに価値を置いてきた。これは、我が国の歴史の中で培われた、日本人同士が共有する感性、思考方法、行動様式などにわたる種々の同質性を前提に、少ない言葉で効率的に意思の疎通を図ろうとする習慣に伴うものである。

しかし、異なる文化的、社会的背景を持つ人と接する場合には、相手の察しに頼る従来の日本的な表現方法では意思が通じにくく、誤解を生みやすい。したがって、外国人とのコミュニケーションの場においては、状況に応じて適切に言葉を用いることにより、明確に自己の考えを表現する必要がある。

(2) これからの時代に求められる日本人の言語能力

(ア) コミュニケーションにかかわる言語能力の重要性

価値観や人間関係が多様化し、また情報が氾濫する現代の社会生活においては、主体性を持った個人として、物事を的確にとらえ、自分自身の考えを論理的にまとめ、相手に応じて適切に表現し、必要な場合には建設的に議論をして結論を得るといった、コミュニケーションにかかわる言語能力が欠かせない。そして、そのような言語能力を生きた力として働かせるには、相手を理解したり相手に働き掛けたりする意識や行動が不可欠である。

このような能力及び意識、行動は、異文化を背景とする人とのコミュニケーションを図るために必要な能力、意識、行動とも共通する。近年、大学生や社会人に、明晰な発話や明快な文章表現を行う力が付いていないという批判が聞かれるが、これらの力を十分に養うことなしには、国際化に対応する言語能力の伸長は望めない。

異文化を背景とする人とのコミュニケーションにおいては特に、①自己の考えを十分に言語化すること、②平明・的確かつ論理的に伝達すること、③相手の文化的背景を考えて表現や理解を柔軟に行うこと、の3点に留意すべきである。一口に「異文化」と言っても、それぞれの文化におけるものの考え方や、発話や行動の様式は多様であることから、すべてを相手に合わせようとするのではなく、相互に相手を理解しようと努め、相手の考えや気持ちを理解するための質問や自分自身を分かち合おうための説明の言葉などを適切に織り込みつつ、誤解が生じないように、やりとりを進めていく態度を持つことが基本となろう。

一方で、互いに察し合って会話を進めていく日本人の伝統的なコミュニケーションの在り方は一つの文化であり、それを共有している人の間では効率的で充足度が高く、心地よさや安らぎを生み、互

いの心を結び付ける働きも強いものである。これからの日本人は、適切に言葉を用いて表現や理解を柔軟に行う能力を高めることと並んで、身近な人間関係などに生きる伝統的なコミュニケーションの在り方を自覚的にとらえるようにすることも大切である。異なる文化を持つ人に対しては、このようなコミュニケーションの在り方によって成り立っている日本人の人間関係について、説明する姿勢を持つことも必要である。

(イ) 国際化に対応する言語教育の在り方

上記の国際化に対応する言語能力を育成するためには、初等教育から高等教育までを通じ、人間関係の構築、維持において、各自の考えや思いを言葉に表現して明示的に伝達することが大切なのだという基本的な認識を養い、人と積極的に意思疎通を図ろうとする意欲を育てること、また発声法や発表技術、話合いの進め方なども含めた、実際的な日本語能力を養う教育を一層充実させていくことが必要である。また、以上の教育は国語のみならず各教科等の指導、さらには学校生活全体の活動を通して達成されるべきものである。

外国人とのコミュニケーションのために外国語を習得することは有効であるが、日本語を母語とする者の言葉の能力の根幹は、日本語能力の習得によって培われることを忘れてはならない。人間の母語能力の基本的な枠組みは、個人差はあるが、おおよそ10代の早い時期ぐらいまでに形成され、それまでに十分な基礎力の習得が達成されなければ、それ以後に日常言語を超えた知的・抽象的な言語の運用能力を形成することが困難になると言われている。また、外国語の習得についても母語の能力がその基盤を成している。したがって、言語教育は人間が持っている母語の習得能力の体系を軸として、総合的・体系的に考えられなければならない。幼少時からの言葉の訓練が生涯の言葉の力の基礎を築くことから、学校教育ばかりでなく、家庭や地域社会における言語環境が大切であることも、十分意識される必要がある。

総じて言えば、日本人としての主体性と異文化への柔軟な対応力を有し、日本語によって確かな表現と理解を行う基本的な能力と、相手に応じて柔軟に対応できる応用的な言葉の運用能力とを備えた、国際化に対応できる日本人を育てる言語教育を推進することが望まれる。